経営学の基本テキストはコレだ！

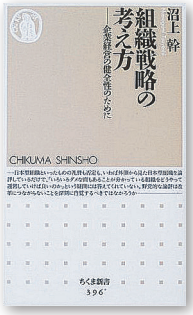
『やさしい経営学』

●日本経済新聞社（2002年）
●価格680円（税込）

藤本　哲　「歌のさわり」は歌のどの部分を指すかご存知だろうか。初めの部分ではない。一番の聞かせ所という意味である。本書は経営学の入門書ではなく、入門書以前の本。経営学の中でも経営戦略と経営組織から、さわりの部分だけを集めたものといえる。そのなかでも一番に読んで欲しいのは、第6日目の2時間目「日本型人事の本質」である。それを読み終わったら、目次を見て興味の湧く章から読んでいこう。

関根雅則　日本でも特に著名な経営学者や企業経営者が、経営学の各テーマにしたがって分担執筆している本です。書名に「やさしい」という言葉が入っており、かつ、カバーイラストも小中学生でも理解できる印象を与えるデザインになっていますが、学者が執筆している部分はそれほどやさしくありません。したがって、経営者が執筆している箇所から読んだ方が、経営学ないし企業経営に対する関心が湧くのではないかと思います。ただし、全体を読めば経営学の重要論点が理解できると思います。

加藤健太　この本の特色は、長期不況の中で成長モデルを提示したユニクロの柳井正やセブンイレブンの生みの親である鈴木敏文といった経営の実践者（経営者）の講義を含む点と、戦略や組織を理論的に解説する際に、トヨタやヤマト運輸などの具体的な話を散りばめた点にある。それゆえ、本書は『日本経済新聞』の連載をベースとし、必ずしも学生向けに書かれたテキストではないけれども、経営学初心者にも取っ付きやすい内容になっている。



沼上　幹
『組織戦略の考え方
ー企業経営の健全性のために』

●ちくま新書（2003年）
●価格756円（税込）

藤本　哲　官僚制組織は悪い組織の典型だと一般的には思われている。しかし健全な官僚制組織は効率的な業務遂行と創造性発揮のために必要不可欠であると、この本は冒頭で述べる。「やるべきことを、きちんとやることが難しいのだ」ということを時々見聞きする。流行の経営用語に飛びつくよりも、昔からいわれている基本的考え方や、自分自身の実感に素直に、愚直に取り組むのが正しいように思える。力強いつかみ、平易な表現で、一気に読める。

関根雅則　そもそも組織とは何であるのかについて考える機会を提供してくれる本です。組織には様々な形態が存在しますが、それぞれ一長一短があり普遍的な組織形態というのは存在しません。本書は、従業員がどのように行動すると組織が機能するのか、あるいは、逆に機能しないのかをわかりやすく示しています。おそらく大抵の人は何らかの組織に属していると思います。自分の所属する組織と照らし合わせながら読み進めると納得させられるところがたくさんあります。

加藤健太　本書を読んで興味深く感じるのは、基本的な組織論について、この世に蔓延する数々の思い込みや誤解を正している点と、（日本の）組織のダメなところ（問題点）と真摯に向き合って議論を展開している点である。著者は「問題に対する解答は、各人がその場その場で自分の頭で考え出していくべきものだ。だから経営学は答えを教える学問ではない」と述べる。大切なのは、本書を指針として、自分で考えることなのである。

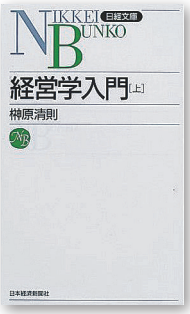
井原 久光
『テキスト経営学
[第3版]
基礎から最新の理論まで』

●ミネルヴァ書房（2008年）
●価格3,360円（税込）

藤本　哲　経営学の授業の組み立て方として大まかに二種類ある。学問の発展段階を順に追っていくのがいいのか、分野毎にやっていくのがいいのか、一概には決められない。この本はいいとこ取りをしているな、というのが初めて読んだときの感想だった。バランスのとれた良い教科書だと言える。それだけではなく、理論や研究の結構詳しい紹介をしていて、理解の促進を助けている。個人的には理想の教科書に近いと思う。

関根雅則　経営学の幅広い領域をカバーした本です。４編構成になっており、第1編では企業論、第２編では経営学説史、第３編では組織論、第４編では個別の経営理論（経営戦略論、マーケティング論、生産管理論、財務管理論など）を取り上げています。経営学の全体像や関連領域を把握するのに適した１冊といえるでしょう。また、多様な理論が登場しますので、大学において研究すべきテーマを発見する一助になると思います。ゼミの選択にも役立つのではないでしょうか。

加藤健太　本書の目配りの範囲はとても広い。“企業とは何か”から始まって、組織と戦略はもちろん、科学的管理、マーケティング、生産、財務、そして日本的経営まで幅広く記述されている。学問は、自分の興味・関心をどこに向けるか、あるいは興味・関心がどこに向かうかを探ることから始まる。と考えた場合、テリトリーの広さは助けになる。ここをスタートラインに関心の向いた分野を自分で掘り下げていけばいいからである。



榊原 清則
『経営学入門[上][下]』

●日経文庫（2002年）
●価格903円（税込）

藤本　哲　上下二巻本の入門書である。上巻と下巻では特色が異なっている。上巻は経営組織論と経営戦略論についての入門的教科書であるが、戦略論については結構詳しく書いてある。下巻では、密接に関わっている戦略論と組織論について、いくつかのテーマを取り上げて解説している。日経文庫は文庫と銘打っているが実際は新書判である。日経文庫には多数の入門書があるので、他にどんなものがあるのか書店に見に行ってみよう。

関根雅則　経営学の主要分野である組織論と戦略論を中心に据えてまとめられた本です。上巻と下巻に分かれていますが、上巻では、組織論と戦略論の基本概念や先行研究が紹介されています。下巻では、「企業成長」、「国際化」、「社内ベンチャー」、「研究開発」といった個別のテーマについて組織論と戦略論の観点から検討されています。初学者向けの入門書という位置づけですが、ある程度経営の知識を積んだ人にとっても十分読み応えのある内容になっています。

加藤健太　この本は、戦略論と組織論の2本柱に丁寧な説明を加えると同時に、企業のダイナミックな成長プロセスに光を当てて、企業のグローバル化と社内ベンチャー、研究開発を組織と戦略の視点から論じたテキストである。また、下巻の付録「経営学の変遷」と「文献紹介」には、けっして簡単ではないが、背伸びをして読んでほしい文献が並んでいる。それらは経営学の“入門者”にとってけっこう役に立つと思われる。

総　評

左から　関根雅則教授／藤本　哲教授／加藤健太准教授

藤本　哲　大学の勉強をするときに授業で指定されている教科書だけを読んで分からないと思っていませんか。昔からある「読書百遍意自ずから通ず」という諺は、一面の真理を表していますが別の場合には間違っています。『Intro』の2004年版にも書きましたが、難しい本を読んで理解するためには、そのための予備知識が必要です。ですから難しい本を読まなければならない場合には、いきなり読み始めるのではなく、その分野の入門書や解説書から読み始めるのがいいのです。「急がば回れ」です。

シラバスを見よう。大学生協購買部の教科書売り場へ行こう。自分の履修する授業だけでなく、他の授業の教科書を手に取ってみよう。目次を見たり、中身をぱらぱらっと見よう。良さそうだと思ったら入手して自分の本棚に並べておこう。すぐに読む必要はない。何か分からない事が出てきたときに、関連するページを索引で探して読むだけでも随分違うものです。

関根 雅則　経営学は、企業をいかに存続、成長させるかを主要なテーマにしています。したがって、経営学の理論は、企業業績を維持あるいは向上させるためのノウハウということができるでしょう（すべてではありませんが……）。ただし、ノウハウといっても、多様な企業に通用するよう抽象度が高くなっています。つまり、個別の企業に対して具体的かつ直接的にどう行動すればよいかを示す指針ではありません。結果として、「経営学の理論は実践では役に立たない」といわれることがあります。しかし、それは間違っています。抽象度の高い理論を実践においていかに応用するかが重要なのです。そこで、学生の皆さんには、経営学の理論を学ぶと同時に、それを応用する力を養って頂きたいと思います。そのためには、実存する企業の事例を研究することが必要です。今回は、経営学の入門書を4冊ほど紹介しましたが、ある程度基礎知識を身に付けたら、次の段階では数多くの事例に触れてみて下さい。

加藤 健太　経営学に限ったことではないが、今年から、本を読むことの重要性をゼミ生に強く訴えるようにしている。大学では、レポートや論文など比較的長い文章を論理的に記述する機会が少なくない。だが、端的に言って、文章は読まないと書けないのである。マンガを読んだことないひとがマンガを書けないように、論文を読まないひとは論文をかけない。

大学で書く文章は、いろいろなルールと作法に基づいていて、表現もある意味、独特である。小説とは当然違うし、ジャーナリストが書くノンフィクションとも違う。ここで紹介した文献は、そうしたルールや作法、表現を学ぶ上でも有用と考える。もちろん、テキスト（教科書）はそれほど面白いわけではない。なぜなら、著者が、初心者向けに基本的なことをなるべく広く、平易に書くよう努めているからである。ピアノだって、ずーっと『バイエル』を弾いていても楽しくない。もっとエレガントな曲を弾けた方が楽しい。だけど、『バイエル』を弾けなければ、ラフマニノフはおそらく（間違いなく）弾けない。

経営学も同じである。テキストの内容を理解してこそ、もっと面白い経営学の世界に入っていける。そこにはエキサイティングな文献がたくさん積まれ、その扉はいつでも開かれている。